

灰と火花—P. B.シェリーの

「お前は何者なのだ、おこがましくも、冒涇するのは？」

池 田 景 子

1. はじめに

1819年は P. B. シェリー (P. B. Shelley) の創作活動が多岐に渡り、多くの代表作が生み出される。1819年秋に執筆された「西風に寄せるオード」(“Ode to the West Wind”) もそのひとつである。しかし、この作品に用いられるイメージやモチーフは「西風に寄せるオード」以前の作品にも見られる。¹ 例えば、この作品における秋風と春の到来のイメージは1817年出版の物語詩『イスラムの叛乱』(*The Revolt of Islam; A Poem, In Twelve Cantos*) の第9編第12連で見られ、火花と灰のモチーフは1819年秋に書かれた断片詩「お前は何者なのだ、おこがましくも、冒涇するのは？」(“And what art thou, presumptuous, who profanest?”) で書かれている。つまり、シェリーの中で蓄積された秋風や火花、灰のイメージやモチーフが1819年に「西風のオード」の中で磨きを掛けられて結晶化したのである。しかし、見方を変えれば、「西風に寄せるオード」以前の断片詩「お前は何者なのだ、おこがましくも、冒涇するのは？」は、シェリーの私的感情が露出されており、イメージや比喩も若干未整理でわかりづらい。本稿では、シェリーの断片詩「お前は何者なのだ、おこがましくも、冒涇するのは？」を取り上げて、その執筆背景や概要を整理したい。特に、この断片詩の執筆契機となった『クォーターリー・レビュー』(*Quarterly Review*) の批評を引き合いに紹介することで、比喩やイメージに隠されたシェリーの意

図を簡単にではあるが、解きほぐしていきたいと思う。

2. 作品執筆の背景

シェリーは1817年に長編物語詩『ラオーンとシズナ』(*Laon and Cythna; Or, The Revolution of the Golden City: A Vision of The Nineteenth Century. In the Stanza of Spencer*) を執筆し、同年12月に出版する。² その物語の内容は、仏革命の挫折をモデルに革命の失敗と理想の革命とは何かを読者に問いかけるものとなっている。もう少し具体的に言うと、主人公ラオーン (Laon) とその恋人シズナ (Cythna) がそれぞれの運命の中で忍耐力を養い、互いへの愛を育み、人類愛を認知することで、殉死という悲劇的な形ではあるが革命に貢献する。作品は12編から成り、前半はラオーンの辿る運命を、後半はシズナの運命を描く長編作である。おそらくシェリーとしては、心血を注いだ力作であったはずである。しかし、ラオーンとシズナの近親相姦の関係は好意的に受け取られず、シェリーは内容面とタイトル名の変更を施すことになる。このような紆余曲折を経て『イスラムの叛乱』は1818年1月に出版されるが、雑誌『クォーターリー・レビュー』は1819年4月の批評で、追い打ちをかけるように本作品を酷評する。

それで、ラオーンとシズナは、新たなタイトル名と若干の修正が加えられ再登場した。もし、[ここに] 改められた心持の形跡を認めることができたら、天性に従い、より良きもの、徳や信仰心へと目を向けた者の再来を心底喜んで、歓迎しようではないか。しかし、シェリー氏は悔い改めていない。氏はまた同じ毒物 (the same poison) を再生産したのである [・・・]。(461)

つまり、『クォーターリー・レビュー』の批評家はシェリーの加筆修正を真っ向

から否定し、シェリー自身の不道德さやキリスト教への冒涇行為を批判したのである。さらに、この批評家はシェリーの『イスラムの叛乱』を詩人口バート・サウジー (Robert Southey) の作品に類似していると指摘する。

[・・・] [シェリーの『イスラムの叛乱』は] サウジー氏による最近の作品に類似する。但し、[シェリーの作品はサウジーのものに比べて] スタイルは地味ではない。模造品の方が原作よりもきらびやかで華麗である。シェリー氏は実のところ、大胆な模倣者である。それゆえ、氏は他山の詩人が持っている豊かな石の数々を、大いにえり集めてくるのだ。(461)

サウジーはワーズワスやコウルリッジなどと親交を持った湖畔詩人 (Lake Poets) のひとりである。シェリーはサウジーを尊敬していた時期もあり、サウジーからシェリーへの影響は、初期作品の『クイーン・マブ』 (*Queen Mab; A Philosophical Poem*) や物語詩「アラスター」 (“Alastor; or, The Spirit of Solitude”) に見られるが、この『クォーターリー・レビュー』の記事の前までにシェリーはサウジーとの差別化を目指すようになっていた。³ おそらく『クォーターリー・レビュー』で、自分の作品がサウジーのものと比較されながらけなされたとなると、シェリーとして決して愉快ではなかっただろうと容易に推察できる。いずれにしても『クォーターリー・レビュー』の批評家は『イスラムの叛乱』のみの批判に限定せず、シェリーを「大胆な模倣者 (an unsparing imitator)」と呼び、彼のオリジナリティを否定したのである (461)。この酷評文が世に出されてから5か月ほど後の1819年10月ごろ、シェリーはこの批評に目を通し、ひとつ思い違いをする。『クォーターリー・レビュー』の批評は実のところジョン・テイラー・コウルリッジ (John Taylor Coleridge) によるものであり、ロマン派第一世代の詩人サミュエル・テイラー・コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) の甥であった。しかし、シェリーは詩人口バート・サウジーであると勘違いするのである。⁴ そして、このサウジーへの答えとして、シェリー

は断片詩「お前は何者なのだ、おこがましくも、冒瀆するのは？」を執筆する。この詩の出版は当時されず、シェリーの死後1839年にメアリによってなされるが、そのとき公開されたのは最初の13行だけでタイトルも日付も付されることはなかった。有名な作品ではないため、ここでは原典テキストも引用しておく。

3. 作品の原典テキストとその全訳

＜原典テキストの引用＞

‘And what art thou, presumptuous, who profanest’

And what art thou, presumptuous, who profanest
The wreath to mighty Poets only due
Even whilst like a forgotten name thou wanest?

Touch not those leaves, which for the eternal few
Who wander o’er the Paradise of fame
In sacred dedication ever grew;

One of the crowd thou art, without a name.
Ah, friend, ’tis the false laurel which I wear,
And though it seems[?] it, is not the same

As that which bound Milton’s immortal hair;
Its dew is poison, and the hopes which quicken
Under its chilling shade, though seeming fair,

Are flowers which die almost before they sicken.
And that I walk thus proudly crowned withal
Is that I know it may be thunderstricken.

And this is my distinction, if I fall,
I shall not creep out of the vital day
To common dust, nor wear a common pall,

[But as my hopes were fire, so my] decay
[Shall be as ashes covering them.] Oh Earth,
Oh, friends, if when my [] [has ebbed away]

One spark be unextinguished of that hearth
Kindled in (1-23)

<日本語による全訳>

「お前は何者なのだ、おこがましくも、冒涇するのは？」

それで、お前は何者なのだ、おこがましくも、
偉大なる詩人だけに当然与えられた冠を冒涇するのは？
お前は忘れられた名前のように盛りを過ぎているではないか。

神聖なものとして奉られた名声の楽園を逍遥する
ごくわずかな不滅の者に与えられた（冠の）葉は変わらず成長したが
その葉に触れるでない。

お前は名もない、群衆のひとりではないか。

ああ、友よ、私がかぶっている月桂冠は偽物だ
それはそうだとばかり見まごうが、

ミルトンの不朽の髪を飾るものとは同じではない。
私の冠に宿る露は毒だ。そして、美しくは見えても
その寒々とした葉陰の下で蘇生する希望は

病にかかるほんのちょっと前に枯れてしまう花なのだ。
それでも私がこのように誇りを失わずに冠を戴いて歩いているのは
私とその冠が雷に打たれてしまうかもしれないことを知っているからだ。

そして、これが私の風格なのだ。もし私が落ちたら
私は運命の日からこっそり抜け出して
ありふれた塵になろうとしないだろう。また、棺にかけるありふれた覆い
もかぶらないだろう。

だが、私の希望が火であったなら、私の塵も
その火を囲む灰であるだろう。おお、大地よ。
おお、友よ。もし、私の「・・・」が引き潮のように衰退したとき

ともされた
ひとつの火花が炉から消えることなくあればいいのに。

4. テクストの概要

本詩における＜お前 (thou)＞とは、『クォーターリー・レビュー』の批評家であり、シェリーの勘違いではあるが、サウジーを指す。この断片詩でシェリー

は、ミルトンには及ばずながら死後も自分の作品が生き残り、世間に影響を与え続ける旨を描いている。シェリーによれば、その影響力はサウジーを超えるものであり、「灰 (ashes)」から生まれる「火花 (One spark)」に喩えられている (“And what art thou” 20, 22)。⁵「西風に寄せるオード」においても同様に「灰と火花 (Ashes and sparks)」の比喩が見られ (“Ode to the West Wind” 67)、この断片詩は「西風に寄せるオード」のもととなる前段階の作品とされている (注1を参照)。だが、「西風に寄せるオード」とこの断片詩は作品全体のトーンや雰囲気異なる。実際、「西風に寄せるオード」は西風 (詩的インスピレーション) に向かって呼びかけているのに対し、この断片詩はサウジーに対する呼びかけである。それ故、「西風に寄せるオード」には、詩人の世界に対する影響力を公的に宣言している趣があり、詩人の運命やありようを普遍的に描いている感がある。一方で、断片詩はシェリー自身の私的な感情が前面に詠われ、サウジーへの対抗意識や、詩人としての矜持や名声への固執がやや強調されている。いわば、詩人の自我がむき出しになっている感がある。以下で詳しく見ていきたい。

まず、この断片詩は「お前は何者なのだ？」といった疑問文で始まる (“And what art thou” 1)。しかし当然、相手のことが知りたくて問いを投げかける、純然たる疑問の文ではない。詩人がこの疑問文を通して<お前 (サウジー)>に対する怒り、いら立ち、不満をぶつけているのは、作品を読み進めていけばすぐにわかるだろう。というのは、シェリーが<お前 (サウジー)>を「おこがましくも、／偉大なる詩人だけに当然与えられた冠を冒涇する」者と呼んでいるからである (“And what art thou” 1-2)。そして、シェリーはサウジーを平凡な詩人であると強調している。なぜなら、「偉大な詩人」の月桂冠を冒涇したサウジーは「忘れられた名前」であり、「名もない、群衆のひとり」だからである (“And what art thou” 2, 3, 7)。サウジーに付された「忘れられた名前」は、『クォーターリー・レビュー』の批評が詩人シェリーの行く末を「忘れ去られる」運命にあると言ったことを反映している。⁶つまり、シェ

リーとしては、自分の名前ではなく、サウジー、お前の名前こそが忘れられる運命にあるんだ、とサウジーをやりこめているのである。

第2連に進むと、ミルトンの不滅の名声への言及が見られる。ここで、シェリーは「その[ミルトンの頭を飾る]葉に触れるでない」とサウジーに言う(“And what art thou” 4)。この否定の命令文は第一連の「おこがましくも／偉大なる詩人だけに当然与えられた冠を冒瀆する」の描写と呼応し、その葉は月桂樹を指している(“And what art thou” 1-2)。しかし、なぜシェリーはこうも月桂冠に拘るのか。この断片詩が『クォーターリー・レビュー』の批判を踏まえているのだとしても、第1連の冒頭からいきなりサウジーを「偉大な詩人」の月桂冠を汚す者と呼ぶところから始まるのはどういうことか(“And what art thou” 2)。実際、月桂冠への言及は件の『クォーターリー・レビュー』には見られない。おそらくシェリーはサウジーが桂冠詩人(Poet Laureate)であったことを言っているのだろう。サウジーは1813年から43年まで桂冠詩人を務めており、『クォーターリー・レビュー』の批評が出されその記事がシェリーの目に入った1819年もその在位期間中であった。ゆえに、桂冠詩人サウジーに対する皮肉であると解釈できる。つまり、サウジー、お前は桂冠詩人を務めているが、決してミルトンのような大物でもないし、そんな大詩人にはなれない、とシェリーは言っているのだろう。

そして、第3連でシェリーは自らの月桂冠はミルトンのものとは似ても似つかない「偽物」と卑下する(“And what art thou” 8)。サウジーは桂冠詩人だが、自身は桂冠詩人でも何でもない、といったへりくだる気持ちもこのあたりの詩行に込められている。そして、次の連で、シェリーの月桂冠から流れる露は「毒(poison)」であり、「その寒々とした(chilling)葉陰の下で蘇生する希望は」すぐに枯れてしまう、と言う(“And what art thou” 11-12)。ここでも『クォーターリー・レビュー』に対するシェリーの皮肉が見られる。既に挙げたように、『クォーターリー・レビュー』の批評家は、『イスラムの叛乱』を「毒物」と評していた(461)。さらに、この批評家はシェリーの主張する愛を、「最

も低い意味での」愛と捉え、「炉辺で交わす愛情」に「水を差した(chilled)」と指摘する(469)。こうしてみると、『クォーター・レビュー』で用いられた表現を用いて、シェリーがサウジーに対抗・反論しようとしている姿が浮かび上がってくる。そして、このような偽の月桂冠であるにも拘わらず、シェリーは「誇りを失わずに冠を戴いて歩いている」と言う(“And what art thou” 14)。古代の迷信によると、月桂樹は雷から身を守ってくれると信じられていた。例えば、シェリーと親交のあったロマン派詩人、バイロンが『チャイルド・ハロルドの巡礼』(*Childe Harold's Pilgrimage, A Romaunt*) 第4編第41連で偽の月桂冠(“The iron crown of laurel's mimic'd leaves”)と雷(“The lightning”)への言及を行っている(Byron, *Childe Harold's Pilgrimage* 4. 41. 362, 361)。⁷シェリーはこの迷信を踏まえ、「その冠が雷に打たれてしまうかもしれないことを知っている」からだ、という(“And what art thou” 15)。つまり、自分はサウジーよりも月桂冠の、言い換えれば詩人であることの意味を知っているとしたいのだろう。そして、次連で「これが私の風格(distinction)」と宣言する(“And what art thou” 16)。この風格こそがサウジーとの〈違い〉(distinction)である、とシェリーは言わんとしているのである。

第6連でシェリーは、「もし私が落ちたら」と自分の行く末(自らの死後における名声)を予言する(“And what art thou” 16)。このあたりの描写はサウジーを評した「忘れられた名前」や「名もない群衆のひとり」の部分と対応している(“And what art thou” 3, 7)。しかし、名声のないサウジーとは対照的に、シェリーは「運命の日」に復活を果たし、「ありふれた(common)」死に方はしないのである(“And what art thou” 17, 18)。ここでシェリーが“common”を二度繰り返して、not と nor で否定しているのは示唆的である(“And what art thou” 18, 17, 18)。詩人の落下というイメージは「西風に寄せるオード」に引き継がれ、詩人のストイックな矜持として表されているが、断片詩に見られる傲慢さや高飛車な雰囲気は削がれている。もっとも、断片詩における詩人の高飛車な口調は、『クォーター・レビュー』で傷ついた詩人

の自尊心そのものだったのかもしれない。そして、第7連と最終連で、希望の火は灰に包まれて、炉床からは「ひとつの火花」が消えることなく「灯される」（“And what art thou” 22, 23）。つまり、シェリーは火（花）を自身の遺骸（すなわち、灰）から生み出そうとするのである。

Notes

- ¹ See Rogers 209-29.
- ² Laon の英語読みは「レイオン」だが、ここでは「ラオン」に統一することにする。
- ³ See Cutmore 163-64.
- ⁴ See *Letters* II 134.
- ⁵ 引用括弧内において断片詩のタイトルは以降 “And what art thou” とする。
- ⁶ “And what art thou” 3; *Quarterly Review* 471.
- ⁷ See Byron, *The Complete Poetical Works* II. 233n364.

Works Cited

- [Coleridge, John Taylor.] “Art VII 1. – *Laon and Cythna, or the Revolution of the Golden City. A Vision of the Nineteenth Century, in the Stanza of Spencer*. By Percy B. Shelley. London. 1818. 2. *The Revolt of Islam. A Poem, in Twelve Cantos*. By Percy Bysshe Shelley. London 1818.” *Quarterly Review*. No. 21, January and April, 460-71.
- Cutmore, Jonathan. *Conservatism and the Quarterly Review: A Critical Analysis*. London: Routledge, 2016.
- Lord Byron, *The Complete Poetical Works*. Ed. Jerome J. McGann. Vol. 2. Oxford: Clarendon P, 1980.
- Rogers, Neville. *Shelley at Work: A Critical Inquiry*. Oxford: Clarendon P, 1956.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Poems of Shelley: 1819-1820*. Eds. Jack Donovan, Cian Duffy, Kelvin Everest and Michael Rossington. Vol. 3. Harlow: Longman, 2011.
- . *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. Ed. Frederick L. Jones. Vol. 2. Oxford: Oxford UP, 1964.